

『現代教育科学』一九六四年四月（明治図書出版）

■文部省の学力調査の方法を批判する

学力調査を教師自身のものに

矢口 新

—

学力調査については、それをやるかやらないかで乱闘さわぎまでしたことがある日本である。今はおさまっているけれども、あれほどさわいだものならそれらしく、その結果については、もう少し本格的に検討してゆくべきである。もっとしつこく、じっくりと検討して、どこまでも日本の教育界にプラスをもたらすようなものを引き出さなくてはならない。そういう努力がすくなくないように見えるが、われわれの反省しなくてはならぬところである。

この問題は、はじめから政治問題としてとりあげられたのだから、もう峠をこしてしまった今、とりあげてみても時代おくれの観があるから、だれも問題にしないのだなどという人がいる。もしそういう事実があるとすると、日本の教育界は、学力調査についてまったくピンと外れな考え方をしているということになる。政治問題をはなれて、字義どおり、学力を調査し、それにもとづいて、学力を高めるためのくふうをするということは真剣に考えられてよいことである。しかしその方法にあやまりがあれば必ずしもよい結果をもたらすばかりで

なく、反対に悪い結果を生むこともあることは、当然予想されることである。なにごとにもよらず物事はそういうものである。よかれと思つてやったことも、予期どおり行かなくて、悪く結果が出るということもないわけではない。そういうことがあるから何事でもやる前にいろいろ慎重に検討してみるのである。しかしやってみなくてはわからないということもあるから、やりながら、いろいろと考えるのである。やる前に予想してみても、そこで意見がわかれることもある。しかし意見がわかれるからといって、けんかしてばかりいたのでは話にならない。あるところで、やってみる。そして悪いところがあれば改めるといふようにやるべきであろう。過ちをあらためるにはばかなかれということもあるから、それでよいと思う。

そういうとき、それみる、だからいわないことではないなどと意地の悪い言い方をするのは日本人のくせだが、お互いに、そういう口のみき方はしない方がよい。しかしまた、一方があまり強引にやってみて一方をおさえつけると、おさえつけられた方が、今度は失敗をひそかに願っているなどということにもなる。こと学力調査に関して、そんなことがあるとしたらまことに困ったことである。われわれはもっとおとなになって、歩きながら、考える人種にならなくてはならないと思う。

学力調査などについては、歩きながら考えることがたいせつであつて、やってみては検討し、検討してはやり、ほんとうに意義あるものにするには、まだまだ努力が必要なのではないだろうか。調査によって条件のわるいところが明らかにされたら、それを実際に改善してみる。そうしてまた学力調査をしたら、学力が向上するかどうか。こうしてほんとうに、学力調査が、何をどれだけ明らかにするかということもわかってくるのである。現在の学力調査の報告といつても、それ

はまだ多くの仮説を含んでいることであって、それらは一つ一つ実証的に明らかにされていかなくはならぬことである。調査をやってデータを整理する方法そのものも、いわば一つの仮説にもとづいているので、やってみて、どこまで真実を明らかにできるかを検討しなくてはならぬことが多くあるのである。それだけの執着と努力がなされて、はじめて、学力調査を日本の教育の進歩に役立たせるものとすることができるのである。

一時あれほどさわいだのに、もういまは忘れてしまって、毎年の年中行事として、テストを受けているだけだ、あとはその成績が発表されるとき、ちよつとさわぐといったことであつては、熱しやすく、さめやすいといわれる日本人的欠陥を丸出しにしていることになりはしないか。学力調査はそういうものかとしていいかどうか。そういうところに問題がある。そういう点をいくつか問題にしてみよう。

二

学力調査が現にこうして毎年行なわれているが、それは現実に日本の教育に何をもたらしているか、それはただ行なわれているというだけでなく、さまざまな影響を与えている。教育界は全体としてそれはどう反応しているのだろうか。つまり学力調査の実存の姿いかにということとは、十分問題にしていいことだと思われる。それは文部省の意図をこえているところもあろうし、また意図どおりになつていない点もあろう。何事によらず、人間の行なうことはそういう性格をもっている。その実存を明らかにすることによって、われわれは次のステップを生み出すべきものであろう。われわれの営みは、そのはじめに意図した人の意志をこえて、一度出発するとそれ自体の論理をもつて動いて行くものである。

最近、教育の現場つまり学校の教育関係者の間で目立つ現象は、学力向上運動とか、学力向上対策とかが活発になつてきていることである。これは必ずしも学力調査のみを目ざしているというわけではないかも知れないが、しかし当面学力調査による成績をあげることが、その重要なねらいとなつてきていることは確かである。しかもこの運動は、県の教育委員会などが大きい原動力となつていようである。つまり県単位の運動となつていようのがまた一つの特徴である。市町村単位としてのそういう動きがないわけではないが、それらも、どちらかといえば、県単位の動きに影響されている場合が多いようである。つまり運動といつても民間運動とか、教師の運動というよりは教育行政単位ごとの対策といった方がよいかも知れない。これは、明らかに学力調査と密接な関係があると見なければならぬ。学力調査でよい成績をとるための県単位の競争なのである。

学力調査の成績の良否ということとは、しろうと目にもすぐわかる。そしてそれが、県ごとに比較しようと思えばすぐできる状態になつているならば、県の行政当局者は教育行政以外の者でも、いな教育行政者以外の方がかえつて、「よし成績をあげろ、他の県に負けるな」などと言い出すことは明らかである。現に文部省の学力調査がはじまつたばかりのころに、その成績のあまりよくない県で、そうとうの予算をとつて、県独自の学力調査を行ない出した県がある。そして文部省のテストの成績をよくしろというわけである。このときの熱心な主張者は教育委員会よりもむしろ県会議員であつたという例もある。このように学力調査は、日本人にとっては一応しろうとわがりのするものなのである。それが正しい理解であるかどうかは一応問題としなければならぬが、その点についてはまた後でのべる。

こういうことが、現在全国多くの府県で、学力向上運動をひきおこ

し、地方によっては学校の教師も、両親も含んで、そういうことになんらかの努力をつづけようとしている原因であろう。最近の各県の教育委員会とか研修会あるいは教委主催の講習会などにも学力向上を中心のテーマとするものも多い。それが具体的に何をもちたらしめているかについてはまた分析を必要とするであろうが、ともかくこうして、全体として学力を向上しようとする動きが大きな火となりつつあることは、あるいは文部省は所期の目的を果たしていることになるのかも知れない。

学力調査の目的は何であるかということもいろいろに言われたが、結局は高い学力を児童生徒にもたせることになってくるようにならなくては意味がないことは確かである。その中には行政的には高いところと低いところとの相違点を調べて、条件を整備するというようなしごとにも含まれてはならぬであろう。しかし毎年の報告をみると、これがなかなかできにくいものであることも確かである。たとえば年々の報告で、成績のよい学校と悪い学校とのひらきは、大きくなりこそすれ、なかなか小さくならない。学力向上への条件整備といっても道路工事のようなものではない。施設設備の問題だけではないのである。生きた人間の営みであるからそう簡単に行かない。何がどれだけの重味をもっているかはわからないが、教師の力もあれば、両親やさらに広い地域社会の力もあろうし、子ども自体の問題もあろう。そういうことを考えると、結局最後には、ひとびとが向上運動をしようとするなどをもっともたよりになることも知れない。こういうふん囲気をつくり出したのは確かに学力調査であるから、それなりの効果があったというべきである。文部省は学力調査によってひとびとにいわゆるハツパをかけたか、尻をたたいたのか、まあそういうことであるかも知れない。

三

しかし学力向上運動に熱心であるといっても、その実態にはさまざまなものがある。たとえばそれが調査そのもの、つまりテスト、試験の成績に直接結びつき、それがあまり強いと、受験準備の様相をおびてくる。日本ではテストというものが特殊なものをかもしだす。あらゆるひとびとがきわめて敏感な反応を示す。よい成績で試験を突破することは、日本人の夢であるらしい。塾や予備校が隆盛になるのは、そこに原因があるが、県全体が、文部省学力調査突破のための予備校となるという現象もおこりかねない。県が学力調査の模擬試験の学力調査を行なう。場合によっては、それがヤマをかけることになればもっけの幸いというものである。学力調査の成績がよいことはイコール学力が向上したことであると考えられる。これはなんら疑うことができないことであるから、そうなれば、全力をつくして学力調査突破運動が行なわれるのはあたりまえである。こういう理論は父兄に一番わかりやすいことであるから、学校のPTAも全力をあげて協力するであろう。PTAが試験突破のために、補習を要求するのはこれまた日本の人情の然らしむることであるから、文部省の学力調査突破という大義名分があれば、堂々と補習授業も行なわれるであろう。多くの教師もこういう一般的ふん囲気の中にあつて、どうしたって、学力調査突破に力を入れざるを得なくなる。教師の真剣味はしだいに高まってきたている。

近ごろいくつかの県で独自に行なわれている学力調査をみると確かに問題の作成のしかたなどに、いくらかの進歩がみられる。これは明らかに教師の中から選手が出て問題をつくるのであるから、そういう選手の問題作成の実力がのびたことなのであろう。どういふ問題が

どのようなにつくられるのが学力調査として意味があるかということ
を研究して行くことは、その教師の教育にも直接影響してくる。どう
いうところに力をいれて授業をするべきかということもわかってく
るのであろう。さらに学力調査の問題作成の選手たる教師たちは、学力
調査の採点もやり、自分たちの出した問題にたいして児童生徒がどん
な反応を示すかもまた研究するであろう。それがまた授業の向上にも
役に立つ。

しかし一般の教師たちは、ただその学力調査を年中行事のように受
けとるだけであって、ただ試験の結果、つまり点数だけに関心をもつ
だけである場合も多いのである。学力調査は本来の意味からいえば、
教師が自分の教育の結果を調査するのであるから、教師の主体性にお
いて行なわれるべきものである。たとえ文部省が行なったとしても、
それは教師にかわって問題を作成しているだけであって、文部省が教
師のあらさがしをしているわけではないのである。ところが教師の中
には、首の座を洗って判決を待つといういきさぎよい(?)者も多くな
るようである。どんな点をとるかや自分のかわるところでない、わ
るければわるいで覚悟はしているというわけである。こうなると、せ
っかく学力を調査しても、自分でその問題のどこにどういう反応をし
ているかを見ようとはしない。そんなことは人のやることだというふ
ん困気になってしまっている。こうなると、せっかくの学力調査も調
査でなく、試験にしかならない。判決にしかならない。教師に自分の
学級の調査をやらせるといふ方法はとらない。そんなことをしたら教
師がごまかすかも知れないなどと考えるのである。そこには調査では
なく、検閲的ふんいきがあるともいえる。

一般の教師が自分で問題をつくり、自分でテストし、その結果を自
分で調べて、そこから授業にどのような改善を加えるかを発見するの

がほんとうの調査である。たとえ人が問題をつくっても、それを自分
のものとして使うことによって、自分ひとりで問題をつくり調査する
より、より鋭い良い調査ができる。そういう態度であれば、調査が調
査としての機能を発揮するが、それが試験ということになって、ただ
結果の点数だけが気になっているだけでは、ほとんど意味を失ってし
まうことになる。調査ということになると、教師の授業改善にもなる
が、その意味がうすくなると、ただの受験準備に走る。それも一生懸
命やるのであろうが、そこには科学的研究による進歩がない。十年一
日のごとき受験技術のくりかえしである。ある学校では、毎日テスト
を行なっている。しかし何回テストをやっても生徒はできるようにな
らない。よく考えてみたら、教えていなかった、というような笑えな
い話がある。一種の受験ノイローゼではないか。

四

学力の向上の条件にはさまざまなものがある。ただ学校だけの努力
が学力を向上させるのではない。それらの条件がどういふ関係にあつ
て、どういう構造をもっているかもまだまだ明らかにすべきことが多
くある。学校のなしうることもたくさんある。教師が高い能力をもつ
ことも必要であり、施設設備の充実もたいせつである。それらがそれ
ぞれどういう意義をはたしているかを明らかにすることもたいせつ
である。

しかし現在もつともわれわれが関心をもたなければならぬのは、授
業ではないだろうか。授業の場面において、教師の能力も、施設設備
も発揮されなければ、結局子どもにたいする影響を与えるに至らない
わけである。その授業も、従来のような教師の活動するしかたが問題
であるより、児童生徒の活動が問題である。児童生徒が活動しなければ

ば、いかなる教師の活動も教材もその効力を発揮していないわけである。結局学力の向上は、授業中に子どもたちの頭脳をどれだけ働かすかにかかってくる。そこへあらゆるものを集中して行くことがたいせつであらう。

学力を調べるのも、その結果をこの一点に集約してやる必要があるのではないか。少なくとも学校でなしうる学力向上への努力の中心点はここにあると思われる。

授業の場面における児童生徒の活動がどうあるべきで、そのための教材がどう準備され、あるいはその他の教具がどうなり、教師の生徒に与える刺激はどうあるべきか、そういうことを示唆するような調査はできないものだろうか。

わたしは、ある一時間の授業をプログラムにして、これを行なうとすぐ、調査を行ない、そのプログラムのどこがどういう問題をもっているかを調べるといって一種の学力調査を行なってみた。それはプログラム学習連盟のしごととして、一万人の生徒に対して行なうたけれども、そういった学力調査を積みあげてみるというのも一考に値するような気がする。

つまり学力をしらべること、前進の方向において考えるということである。

〈国立教育研究所研究員〉